

厚生労働科学研究費補助金
(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)
分担研究報告書

海外における箱出し調剤の現状および一般市民の箱出し調剤に関する認識調査

研究分担者 武田香陽子 北海道科学大学 教授

研究要旨

(背景) 厚生労働省は令和4年7月に「薬局薬剤師の業務及び薬局の機能に関するワーキンググループのとりまとめ」を公表し、調剤業務の一部外部委託、箱出し調剤、調剤機器の導入、事務員等の活用等、対物業業務の効率化に向けた方針を示した。その中でも本研究班の主軸とする箱出し調剤が実現すれば、調剤業務の一貫した自動化が飛躍的に進み、薬剤師以外のスタッフが分担できる業務が拡大することで、薬剤師の対物業業務が効率化され、対人業務の時間が確保されることが期待される。

(目的・方法) 本研究は上記下線の実現が期待されるもののうち、「箱出し調剤の実現可能性」についての日本での検討のために、①海外で古くから箱出し調剤が実施されているドイツおよび途中から箱出し調剤を実施してきたイングランドの両国の現状を把握することから海外への視察を実施した。また、②一般市民に対する箱出し調剤の認識については全国の一般市民の方に箱出し調剤について定義した上で、箱出し調剤となった場合について、あるいは箱出し調剤を実施することについての認識をWeb上でアンケート調査を実施した。

(結果) ①海外視察で得られた知見は資料6に詳細を記載するが、概要として、ドイツでは医薬品の配達含めて国としての体制整備されており、箱出し調剤の文化が根付いていた。また、ここで重要なのは患者や市民に対する情報リテラシー教育であり、添付文書をそのまま渡し、そこに記載されている効能効果、副作用、用法用量までを自分で読んで理解することが当然の文化であった。一方、イングランドでは、箱出し調剤がスタートしたとはいいつつ、ほとんどの箱出し調剤に移行しているとは言えない状況が垣間見えた。そのため、2025年8月時点では開封した医薬品に対する保険請求などが煩雑化されていた。②一般市民に対するアンケート調査の詳細は資料7に添付している。一般市民の69%は箱出し調剤に関する不安はない、あるいは箱出し調剤で新たなサービスがうけられるなら良いと65.1%は回答していた。

(考察) 様々な国の状況はあるにしても、品質管理や品質保証、科学技術の革新による機器の改良の社会的背景も含めて、遠くない将来、患者・生活者に丁寧な説明をした上で、日本でも箱出し調剤がスタートするための準備をする必要が出てくると考えられる。そのためにも、ここに関わる関係機関への意見聴取と連携を図りながら、一般市民への説明とさらなる医療サービスを検討しつつ薬剤師は時代のニーズに対応する努力をし続ける必要がある。

A1. 研究目的（イングランドおよびドイツ視察）

「対物業務を効率化するための「箱出し調剤の実現可能性」について、日本での検討のために、海外で古くから箱出し調剤が実施されているドイツおよび2000年代に入ってから箱出し調剤を実施したイングランドの両国の現状を把握するため海外視察を実施した。

B1. 研究方法

海外視察は2025年8月16～23日にドイツの一般的な地域薬局Central-Apotheke、イングランドの公的医療制度National Health Service (NHS)の下で運営されているRosehill Pharmacyを訪問した。訪問者は本研究分担者武田 香陽子（北海道科学大学薬学部）と研究協力者 近藤 悠希（熊本大学薬学部）の2名であった。質問項目については予め研究班で意見を聴取後、アンケート調査項目を選定し、施設担当者に送付した。その内容についての現場の状況確認と、細かな点の確認を行った。調査対応者はドイツCentral-Apotheke薬局長のアッセンハイマー 慶子氏、およびロンドンNHS病院薬剤師の國分麻衣子氏に依頼した。担当者の選定は日本の状況にある程度把握していること、細かな法的体制や法的基準等を正確に聴取できる方とした。本調査については、熊本大学大学院薬学部倫理審査委員会を通し、倫理審査番号で審査されたものである。そのため、本調査はその審査内容に従って実施した。

C1. 研究結果

ドイツでは医薬品の配達を含めて国としての体制が整備されており、箱出し調剤の文化が根付いていた。また、患者や市民に対する情報リテラシー教育がなされている結果なのか、添付文書はかなり細かい点まで何枚にもわたって記述されているものが渡されていた。さらに、箱出し調剤の機器は一般用医薬品も同様な取り扱いとして医療用医薬品と管理されており、一般用医薬品と医療用医薬品のどちらもが同じシステムおよび機器で管理されていることから（麻薬などは別）、その患者の購入した医薬品全てを同じシステムで管理できているという点も大きな違いである。

イングランドでは箱出し調剤が完全には浸透しておらず、薬局や処方内容に臨機応変に対応していたが、保険請求については2025年8月時点では煩雑化しており、同年10月に新たに法的改訂があり、対応が統一化されつつあるように伺った。また、地域の中での薬剤師の役割はドイツに比べて国の体制が整っており、健康週間が時期によって設定され、疾患を設定され地域で健康管理が進められている。NHSへの受診は緊急時以外は難しい状況であるものの、地域薬局が関わることによって、

受診までの期間が短縮され、受診勧奨した薬局に処方箋が流されるなど、薬局も一般市民の方も地域薬局を利用するメリットも大きいように伺えた。

D1. 考察

本研究結果から日本における箱出し調剤のためには、国による体制整備と箱出し調剤に関わる関係機関との連携が必要不可欠であると考えられた。

A2. 研究目的（一般市民の箱出し調剤に関する認識調査）

「箱出し調剤」の可能性を具体的に検討するため、「箱出し調剤」に関する一般市民の方々の認識・意向を検討するための調査である。

B2. 研究方法

本調査の趣旨を理解し、アンケート調査に回答することに同意をした、全国の一般市民計651名の方に回答いただいた。調査方法：Webによるアンケート調査、全21項目を調査した。調査は2025年12月に実施し、解析方法は得られたデータを記述統計で一般市民の方の意識・認識を示した。

（倫理審査）：北海道科学大学薬学部倫理審査委員会の承認を経て、倫理審査番号 第25-19号である。調査は上記指針に則って実施した。研究対象者に対する人権擁護上の配慮および研究方法による研究対象者に対する不利益、危険性の排除や説明と同意（インフォームド・コンセント）に関わる内容は北海道科学大学薬学部倫理審査委員会の規定に則った方法を設定した。特に本研究の個人情報には研究者には非公開で調査会社からデータが提供されることから後で回答を撤回したくてもできない旨についてもアンケート調査画面の冒頭で説明し、同意を得た方のみ回答できるように設定した。また、回答者の負担を考え回答内容な10-15分以内で回答できる内容とした。

C2. 研究結果

1) 回答者

最終的に一般市民651名から回答を得た。箱単位でお薬を渡された場合、「管理方法は変わらない」と回答した方は651人中45% (293人)、「管理しやすい」と回答した方は13.2% (86人)、「今までの方が良い（薬袋）」は25.8% (168人)、「分からない」は16.0% (104人)であった。お薬の説明書が同封された場合については、651人中「今まで通りのお薬説明書も欲しい」は26.1%、「箱に入っても良い」は51.0%、「分からない」が22.9%だった。箱出し調剤に関する不安は69% (449人)が「ない」と回答した一方、「ある」は48人 (7.4%)、「分からない」は154人 (23.7%)だった。48人の不安は飲み忘れ、飲み間違

い、読めるか心配、何を読めば良いか心配、なんとなく不安、等があった。

箱単位でお薬を渡された場合、健康増進や維持に関するサービスが増えたらどう思うか？について、651人中「良くない」は9人(1.4%)、「良い」は424人(65.1%)、「変わらない」は173人(26.6%)、「分からない」は45人(6.9%)だった。

「箱」単位でお薬を渡されることを希望しますか？について、「希望しない」は67人(10.3%)、「希望する」は225人(34.6%)、「分からない、今は判断できない」は179人(27.5%)、「どちらでも良い」は180人(27.6%)だった。「箱」単位での調剤を希望しないと回答した67人に、「どのような場合であれば希望するか」を聞いたところ、丁寧な説明、お薬説明書を別にもらえれば、待ち時間が減れば、さらなるサービスが提供できれば等を選択いただけたが、いかなる場合も希望しないと回答した方は16人(651人中)2.5%だった。

D2. 考察

薬剤師業務として、対物業務を効率化し、対人業務を充実させるためには様々な対応が進むと考えられるが、箱出し調剤については一般市民の理解は丁寧な説明とさらなるサービスが提供できれば進む可能性が示された。

G. 研究発表

1. 論文発表

- ・入江 徹美, 武田 香陽子, 橋場 元, 萱野 勇

一郎, 薬局・薬剤師の調剤業務の充実 ～薬剤調製の効率化・高精度化に向けた取り組み～, *YAKUGAKU ZASSHI*, 誌上シンポジウム序文, 令和7年12月22日採択, 令和8年5月号に掲載予定)

- ・武田 香陽子, 薬剤師以外の者による調剤補助・支援業務の実態調査と今後の検討, *YAKUGAKU ZASSHI*, 誌上シンポジウム序文, 令和7年12月22日採択, 令和8年5月号に掲載予定)

2. 学会発表

- ・近藤 悠希, 武田香陽子, ドイツ、イングランドでの現地視察調査報告(資料7)
- ・武田香陽子, 処方単位で個包装された薬剤を用いた調剤に関する一般市民の認識・意向調査(資料8)
公開シンポジウム(令和8年3月5日, Web開催)

H. 知的財産権の出願・登録状況

該当なし

1. 特許取得
該当なし
2. 実用新案登録
該当なし
3. その他
該当なし

(引用文献) なし